

保育への視座 (12)

——若い保育者の方々へ——

河邊 杲

今回まで、数多くの保育実践の参観をしたり、保育者の実践の記録を読み解きながら、そこで私の独断と偏見になっているかも知れないことを憚りながら、少くとも私自身の四十年近い幼児教育へのかかわり（幼稚園教育

行政や園長として園経営への参加など）に

よって得た経験的な知見を手がかりとして、自分自身で新しく発見したことから私流に選択、取材し記述して来たのであるが、考え

てみると、終わるところを知らずのように、なにかエンドレス的に限りなく続くようにも感じられると同時に保育の奥行きのはかり知れない深さと広がりをもたらすため気づかされてきた。

今回は最近特に感じる「私の保育」と「保育の姿勢」についてとりあげてみたいと思う。

最近になって参加した園内研修や地域での研修会で気がつくことは、実践の記録として

記述されていることや、話されていることに、保育の具体性に乏しいので屢々、私はその具体について質問をしないと保育の事実がどうであったのか、保育の本質に照らすこともできかねることに会うことが多くなつて来ている。

生命をもつ保育者が、生命をもつ異質の子どもひとりひとりと出会うのであるから、当然、そこに個別性や偶発性を忌避することはできない。特殊、特殊の連続が、保育そのものと言える。しかし記述や話されることは極めて概念的、観念的でなにか一般化することによって保育そのものが相互に理解できたかのような錯覚に陥っている事実によく出会うのである。保育者が毎子どものかかわりの中で悪戦苦闘されているそのなまなましい苦勞の事実が少しも伝わってこない。教科書的であり、どこかの講演や研究会の指導で学

ばれた教育概念の羅列で、少しもその保育者や子どもの顔が浮かんでこない。このままでは折角の新しく改定された教育要領に示された主体性云々という精神が育つはずがない。保育の発展も望めないと思う。

私はどうしても借りものでなく「自分の保育」は自分のことばで語り、記述してほしいと思う。少し保育が観念的、概念的になり過ぎてはいないかと現状を私は忌む。そこで私は「私の保育」の確立がまず必要だと思ふ。「私の保育から私たちの保育へ」ということも聞く。このことも正しく受けとられればよいのだが、「私の保育」と「私たちの保育」のそれぞれの意味や「から」と「へ」の意味をしっかりと受けとらないと「私の保育」を狭い意味に解して勝手な保育と受けとったり（管理的発想）すれば保育の実体はますます見えなくなってしまうだろう。

現在保育実践の多くの問題は、子どもの実

態と称しておられるあるがままの子どもとこ
うあってほしいと理想とまで言えなくても、

それぞれ保育者がもっている価値観にもとづ
くねがいとの間をどう調和的につなげていく
かということである。しかしどう援助すれば
調和的につながって行くかばかりが問題にさ
れて、「保育者の姿勢」があまり問われない
ままになっているところに保育の進展がみら
れないのではないかと私には思えるがどうで
しょうか。

今年の六月を過ぎた頃、F 幼の K 先生の六
月一日二日の実践記録（ここの幼稚園は余り
記録の形式がきめられていないので自由記述
である。）についてコメントがほしいと依頼
を受けて読ませてもらって、その中にある K
先生ならではの「私の保育」にふれ、当然で
はあるがそのことの大事さを再び一層強く感

じたのである。

その K 先生ならではの「私の保育」の中味
について少し述べてみたい。

「六月に入って今日から新たな気持ちで一
日を過ごしました。……昨日までとはちょっ
と違った感じでした。……はじめて子どもた
ちの中にはいれた感じがした。……」

ここで気がつくことは、先ず第一に常に新
鮮な心持ちで一日を過ごすことに心がけられ
ている様子を読みとることができると。保育の
態度などで「感じとる」「気がつく」「できる
だけすぐに応じる」などということは、とて
も大事なことだが、まず新鮮な気持ちや態度
で、子どもと出会えるように心がけることが
最も重要なことだと思ふ。常に新鮮な心持ち
で子どもと共に生活することは、保育者が、
自然で、真の自由感をもつということと無関
係ではない。

また、子どものように、こだわりの心がなく、すなおになれないと新鮮な気持ちにはなれないと思う。保育者としてのねがいをもちつつけることは大事でも、それにこだわり、それをとらわれの枠組として固執すると、子どもの真の姿を見失ってしまい易い。

次に第二はそれぞれの子どもたちが心の奥にもっているものをすなおに表出できたり、表現できるような雰囲気をつくることの大事さに気づかれて来たことである。それは次のつばさ（四歳児男児）との関係の記録に読みとくことができる。

「最近、調子の悪い、つばさは、昨日お母さんなしで過ごすことができたとき、『先生、おんぶして』といった。その時、おぶうとつばさはすぐ喜んで満足そうにしていた。」

「私はつばさの心持ちを受けとることができるようになって、身体がとても大きく、重た

いのですが、抱いたり、おんぶしたりしている。いままで年中クラスに進級したことや、身体が大きく重いこと、男の子だから恥ずかしく思うのではないかと表面的な推測のみで見て来ていた。……つばさと真向かいになってみてはじめて人一倍甘えんぼうであることや、心の中で常に抱いてほしいなと思っていることを実感した。……こんな基本的なことが、つばさに対して、私の中に欠けていたんだ。……」

と述べられていて、子どもが真に心の奥底にあるものを保育者が気づくことや、また心の奥にあるものを表出したり表現できるように雰囲気をつくることの大事さを示唆してくれている。

さらに、第三には、子どもとの接し方などその保育の技術、方法のみを性急に追求して、子どもの心持ちにどれだけふれているか

に気づくことの大切さをこうたろうとの関係の記録の中に読みとることができる。

「かかわり方の工夫と試みをつづける過程でなかなか接点が見つからず、またこうたろうも心を開いてくれず、どうしたらよいかについて悩んでいたが……前におんぶして保育室へ連れて帰ったとき、『コアラちゃん』とい

って喜んでいたことから、こうたろうの純粹な面のあることを感じていたので、もっと彼自身を理解するためには、抱いたり、スキンシップをして近づきたいと思っていた。きょう、たまたま、爆弾を作ったといつて見せに来たとき、こうたろうを抱きかかえて、ぐるぐる回りをして爆発する感じを表してみた。この時、今までに見られなかった喜びの様子がすぐくわかった。……やっと、こうたろうとの接点を持ったように感じた。」

と、K先生とこうたろうとのかかわりの中

に、発見されたというよりも確かな手ごたえのようなものを感じとられたことが、心持ちにふれることであり、この心持ちにふれるために、いろいろと保育者自身が心を開いて、いろいろ工夫し、試してみる姿勢、それは、極めて個別的な保育の過程であることは間違いないと思う。

このような偶発性や個別性をも尊重した「保育の過程」を「私の保育」の確立と私は考えるのである。

K先生ならではの「私の保育」が存在するからこそ、それをまたさらに保育者仲間やある指導者のコメントによってより確かめられ、主観的な保育態度が少しずつより客観的なものになっていくのだと思う。「私たちの保育」が最終目的ではなく、「私の保育」のより客観化をまず目指すべきだと私は思う。

(元・洗足学園短期大学)